

さえくし嵐やみねによはるらん尾上の松に霞かゝれる
一、旅懐と蓮の歌
十八日。旅懐二首

露はげに草の假寝を武藏野の果しなきにはいつか習ひし
世の憂にならばざりせばいかならん秋を重ねる旅の衣手
忍ばずの池の蓮

そこ清き池の心もおのづから蓮の浮葉のつゆにしられて
池水にかけを移してはちす葉の清きをみがく露のしら玉
風かをる池のはちすに浪かけて花の心にみゆるしらつゆ
濁にもしまぬ蓮のいかなればくれなゐ深き色に咲くらん
此一首蓮花に書きつけて、菊池武康の許へ遣しければ。

蓮葉の上はつれなき花にこそ絶すも色の見えにけるかな
一、立春の詠不叶心

抑爲各點京師へ可差登愚草の内、立春の詠不叶心。依之
心のうかぶに任せ綴之。

立春

更くるまで冴えし嵐の夢も今朝霞に絶えて春は來にけり

落花

文選云。鳥散餘花落。

今はとてよそにうつろふかほ鳥の羽風にもろき山櫻かな
螢

そこはかと蟲もなくなる叢にかゝげつくさぬ螢火のかけ
霧

星合の空もほどなきはつ秋にたちなへだてそあまの河霧

橋霜 人跡板橋霜

夜をこめて誰か過さん柴橋の霜にあととふ岩のかけみち
一、六月祓その他の歌
廿二日。

尋いる花の枝折となりしだにうらみにかへる春のやま風
わすれては秋かとぞおもふ枕かる草の庵の夏の夜なく
秋にさへたへこし物を難波江の葦のかれ葉の夕暮のこゑ
立秋の意を

誰かまたかゝらん袖の露ならめ桐の一片のけふのゆふ暮
庭前の萩

さく萩の一もとゆゑに武藏野の草しく床のうさぞ忘るゝ
六月祓

暮かゝる日影涼しき御禊川秋こそものにまだき立つらん
水無月の空暮かゝる山川にぬさもとりあえず御禊をぞする

可觀小説卷四十

一、初秋の意を

吹おろす風のけしきは雨雲のとだえし峯に秋や來ぬらん
とはでのみ有るべきものを萩の露蓬がもとの秋のはつ風
おほかたの草木は秋を心なる袖よりのちに露や置くらん
音かはる風の氣色に草木よりさき立つ秋の袖のうへの露
八重むぐらいくへかとぢし我宿をおなじ心の秋や立らん
一、小瀬助信の病氣危篤
七月二日。小瀬又四郎助信金澤へ發出。是は病氣危篤に付
御暇を願ひ、實父堀部養叔同道す。同門室直清へ消息して
例の一首を送る。

別れにしひだりみぎりの袖の露あきの心ぞおもひしらるゝ
此兩人同様の學生なるによつてかく申侍りける。又基庸の
許へ申遣。

さればよと思ひ合せし夢の世の果敢さ今は數もしられず
基庸水無月の歌として、
みそぎせし加茂の河原の河波にかけてしのぶの岡の夕霧

是は去年在京の事を思ひてよめる也。

初秋

蛸のなくやむかひの岡の邊の松とはなしに秋は來にけり
雀の子の庭におりむ侍るを、あはれおぼえて、此ほど餌な
どまき侍るに、いたくなれ侍るまゝ。

なれてくる雀を友とあしすだれまきあげて見る窓の吳竹
織女待夕

暮るまを猶こそまため星合の空たのめなる契りならねば
けふまでは心ながくも契り出て暮るゝをいそぐ星合の空

七夕

年ふれどちぎりは朽ちぬ天の川深きこゝろの水のしら波
牛女にかさむととへば玉くしげ明る辛さの有もこそすれ
星合の空くれ竹に打はへてなれもねがふやさゝがにの糸

一、織女の後朝

八日。織女後朝

けふはまた天の河舟楫をたえ行衛もしらす戀やわたらむ
夕露をかけし願のいともかくみだれて今朝は秋風ぞふく
たちかへりまたの逢瀬をちぎれども年さへ隔つ天の河霧